



Choji. Magono 著

Thunderstorms

Elsevier Sci. Publ. Co., Amsterdam, 1980, B 5 判, 261頁,

\$ 63. 50.

著者の孫野さんから、英文で雷の本を書いているのだという話を聞いたのは、もう3、4年も前のことだったと思うが、いよいよそれが出来上った。上記の通り Elsevier の“Developments in Atmospheric Science”のシリーズの第12巻になっている。内容は

- Chapt. 1 Structure of Thunderstorms
- Chapt. 2 Precipitation Electricity
- Chapt. 3 Charge Generation in Thunderstorms
- Chapt. 4 Non-precipitating Thunderstorms and the Feed-back Process of Electric Fields and Precipitation
- Chapt. 5 The Lightning Discharge
- Chapt. 6 Recent Advances in Thunderstorm Electricity

の6章に分かれ、そのあとに Appendix, References, Subject Index となっている。

この章立てを見てもわかるように、雷雲の気象的な、また電気的な構造から始まって、降水の電気、雷雲内における電荷の発生、電光放電（この章の中に雷災防止を含む）と話は系統的に一貫して発展して行くのであるが、その中で著者が最も力を入れたのは、第3章の雷雲内における電荷の発生の章だということ、そのため話の程度が少し高すぎるくらいになってしまったという感想を洩らしておられた。この章のページ数は、他の章に比べてきわ立って多くなっている。

この書物を書くに当たっての著者の態度は、自分の考え方で1本の筋道を立てて、それを読者に理解させるという行き方ではなく、こういう考え方もありますよ、またこんな考え方もありますよというように、歴史的な発展の跡をたどりながら、列挙式の立場に立っている。

それに関連しては、最終章第6章の最後に付け加えられたコンクルーディング・リマークを引用しておくのも面白いかも知れない。「これらの分野の研究は現在も進歩しつつあり、その発展には恐らく終局はないであろう。この書物の読者諸君が、どうして電光放電がおこるか、

そして如何にしてその災害からわれわれ自身を守ることが出来るかという一見簡単な質問に答えるために、何故このように長い長い説明が必要であったかを理解して貰えれば、著者はそれで十分満足である。」

最初に書いた章の見出しの所でお気付きの方もあったと思うが、最終章第6章は最近の進歩となっている。これは著者がこの書物の執筆に着手した数年前以後の各分野における進歩をまとめたもので、雷雲のレーダーによる観測結果というかなり気象色の濃いものから、人形を使った落雷実験まで収録してある。

Appendix II にはスイスのベルガー教授がまとめた Suggestions for the Protection of Persons and Groups of People against Lightning Hazards

が収めてある。これは1968年東京で、第4回国際大気電気会議が開かれた時、その前年1967年夏の松本深志高校生徒の西穂高独標集団落雷事件を紹介したのが機縁となって、IOGGの下部機関である大気電気連合委員会の活動として作り上げたものである。日本の大気電気研究会の会員は、この原文や翻訳文を見ているが、そうでない人々には興味があると思う。

References は25ページに及んでいるが、挙げられた文献は約650篇、第2次世界大戦前については若干の遺漏も致し方ないとして、これも研究者に大きな便益を与えるものと思う。

紹介者は英語の素養は全然駄目なのだが、この本をざっと通読した感じでは、アメリカ流に流暢で、とても日本人の書いた英文とは思えない。著者の序文によると、英語を母国語とする3名の友人に原稿や校正刷を見せて直してもらったという事で、如何にもと思わせられる。

著者の孫野博士が、その研究室の人たちとともに、永年雲物理、エアロゾル、大気電気の研究を続け、それらに関係した研究論文も沢山発表しておられることは付け加えるまでもなく、我ら会員の間には周知のことである。従来この種の英文、独文の専門書は、それらの著者の専門分野が、大気電気学とか電気工業とかにあまりに偏っていたため、読んでいてどうも食い足りない感じの強い所があった。著者の専門分野はこの本に盛られた領域は十分カバーしているから、そういう点でも、この書物は、日本の研究者だけでなく、外国の研究者にも広く歓迎されるものと思う。

(島山久尚)